

ひじりらぼ

## 第1回親の学び場『聖塾』を終えて

新型コロナウイルス感染症拡大により2年間中断しておりました中学保護者対象の学習会：親のための学び場『聖塾』を、5月14日(土)に再開・実施いたしました。150名を超える多くの皆様にご参加いただきました。振り返りシートでは、多くのご意見・ご要望を頂戴しました。今後に活かしたいと思います。



そもそも、この学習会のねらいは、保護者の皆様から思春期を迎える子ども達とどのように接したら良いか、どうすればわが子を幸せな将来に導くことができるのだろうか、という疑問について共に考え、相互にヒントを得ようということにあります。巷には、著名な評論家も含め数多くの教育論や実践が紹介されていますが、詰まるところ子育てに正解はありません。しかし、それなりに、否「人並み以上に充実した満足度の高い生活を」、というのが親心でしょう。それゆえ悩みはつきないのです。

自我に目覚め、あたかも卵の殻を割って外に飛び出す雛のように、ある面では子ども自身がもがき格闘しているのです。だからと言って、親が殻を取り除いたり、外から殻を破ってしまっは元も子もないのです。自らの手でもがき苦しむからこそ、新しい世界との出会いが輝いて見え、切り拓こうとする勇氣と力が明日に繋がる自信になるのです。

私自身、子育てに確固たるものは何もありませんが、下の子が1歳半になってから毎年、家族で海外旅行に、しかもあまり観光地としては有名ではない場所に連れて行ったことや、今でこそブームになっている山登りに良く出かけたことくらいです。お陰で子ども達が旅行に出かけることを躊躇することなく、言葉や宗教、自然など制限された中で何か楽しみを見つけ、感動する場面は与えられたと思います。わが子にとって一番の思い出旅行とは言えば、イランへの家族旅行だと二人とも口を揃えて言います。ドライバー付きの車1台を貸し切り、家族4人で1週間掛けてイランをほぼ1周するというものでした。小学校への突撃訪問やピクニック中の家族に合流してお茶の時間を過ごしたり、民家訪問など、ちょうどアメリカ合衆国によるイランへの経済制裁で欧米からの観光客がほとんどいなかったことも幸いでした。こうした経験と感動が、新しい自分との出会いをもたらすのだと思います。

ただ一方で、少子化が進む日本の社会にあって、高度経済成長期に比べて子どもと接する時間はかなり増え、子育てに参加する父親も増えています。しかし、それにより余計に子育てについて、悩み多き保護者の方が増えているという実態があります。保護者の皆様と一緒に悩みを共有し、解決の糸口や方法の手がかりを学ぼうという『聖塾』の企画、今後もお楽しみいただければ幸いです。

校長 石飛 一吉